

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(GCC:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/GCCgeneral.html>)

マイライブラリー:0263

(注)本稿は 2013 年 5 月 8 日「アラビア半島定点観測」に掲載したものです。

2013.5.8

前田 高行

(ニュース解説)安倍総理、二度目の中東訪問—2007 年と今回の違い

安倍総理が 4 月 29 日から 5 月 3 日にかけてロシア及び中東 3 カ国(サウジアラビア、アラブ首長国連邦・UAE、トルコ)を歴訪した。首相は 6 年前の 2007 年、丁度同じ時期に就任後初の外国訪問として米国及び中東 5 カ国(サウジアラビア、UAE、クウェート、カタール、エジプト)を訪れている。6 年の歳月を隔てた中東歴訪を比較してみると変わらぬこと、変わったこと、いくつかの興味深い点が見られる。

エネルギー外交の重要性は変わらず

日本にとって中東特にサウジアラビア、UAE などの GCC 諸国は石油・天然ガス(LNG)の主要輸入国であり今も昔もその重要性は変わらない。2007 年当時、石油価格は一本調子の上昇傾向にあったが、これは高度成長の波に乗った中国、インドが世界中の石油を買い漁り、また投機マネーが石油市場になだれ込んだためであった(なお原油価格は翌 2008 年に史上最高の 147 ドルに達した後、リーマンショックで急落している)。今回の場合は日本の原発がほぼ全停止し石油・天然ガスの需要が急増、加えてイラン原油の輸入制限もあり安定供給ソースとしての GCC に対する期待感が高まった。

一方、GCC 各国は原油・LNG 価格の高騰により有り余るオイル・マネーを手にしたものの世界的な景気低迷でマネーの運用先は国内に向かわざるを得なくなった。各国政府は産業の多角化或いは鉄道・病院・教育等の社会インフラ投資を掲げたが、実現のためには外国からの技術導入が必要となる。現在日本を含む外国企業に大きなビジネスチャンスが広がっているのである。

石油の安定供給先を確保したい日本政府。ビジネスチャンスを自らの目で確かめたい経済界。両者の思惑が一致して首相自らが「トップ・セールス」を掲げ、経団連会長を団長とする大型経済ミッションが現地を訪問した。エネルギー外交の構図は 6 年前も今回も変わらない。

訪問国の違い

冒頭に述べたように中東訪問国の数は前회가 5 カ国、今回は 3 カ国である。このうちサウジアラビアと UAE は共通しているが、前回訪問したエジプト、クウェート、カタールは今回対象外となり、その一方新たにトルコが加えられた。2007 年当時のエジプト大統領はムバラクであり米、イスラエル、エジプトによる中東和平が模索されていた時代であった。安倍首相がエジプトを訪問したのは「平和と繁栄の回廊構想」を掲げて

日本の存在感を示そうとしたからである。しかし2011年の「中東の春」によりムバラク体制が崩壊、イスラム勢力に変わった結果、今では中東和平の行く先が見えない。加えてエジプトは今や未曾有の経済危機にある。このような時に日本の首相が訪問すれば金の無心をされるだけである。エジプトを訪問しなかったのは賢明である。

これに比べトルコは2020年のオリンピック開催を東京と競うほど経済力がついている。今回受注が決まった原発など大型インフラ商談が目白押しであり、経団連大型ミッションを同行するのはまさに流行語で言えば「今でしょ！」なのである。

GCC 諸国訪問はどうであろうか。今回はクウェートとカタールが対象外となった。このうちクウェートは前回訪問の主要目的が当時同国に駐留していたイラク支援の自衛隊を激励することであったことを指摘しておきたい。カタールを対象外にしたことは微妙な問題である。日本はLNGの15%を同国に頼っており東日本大震災後、同国からのLNG輸入は急増した。但し高値を掴まされたことも事実である。安倍首相のロシア訪問がLNGのカタール依存度を下げるためであったことは言うまでもない。欧州・アジアの景気低迷と米国のシェールガス急増で天然ガスは買い手市場の様相を見せ、カタールはLNG販売に苦勞している。安倍首相はあえてカタールで「LNG物乞い外交」をする必要がなかった、と言えよう。

サウジアラビアとUAE訪問の意味は？

サウジアラビアとUAEは前回に続く二度目の訪問である。両国だけで日本の原油輸入量の6割弱を占めている。両国の石油埋蔵量は豊富であり生産余力も大きい。日本の原油確保には欠かせない国であり、首相の中東訪問先としては当然の選択であったろう。

安倍首相はサウジアラビアではサルマン皇太子と会談、投資協定を締結、またUAEではムハンマド・ドバイ首長(副大統領兼首相)及びムハンマド・アブダビ皇太子らと会談、原子力協定に調印した。UAEではさらに2018年に期限を迎えるJODCO(現国際石油開発)の利権延長を申し入れ前向きな発言を得たと報道されている。なお両国とは防衛問題も話し合われ、審議官級の定期協議が開始されることになった。これはイランを意識したペルシャ湾ホルムズ海峡の安全航行の問題或いはインド洋のソマリア海賊対策を念頭に置いたものであろう。

惜しむらくはサウジアラビア国王及びUAE大統領兼アブダビ首長の両国のトップに会えなかったことである。アブダラー・サウジ国王は健康が優れず電話対談だけになったとのことであり、また英国に国賓として招かれたハリーフア・アブダビ首長とはすれ違いになった。外国トップが訪問相手国のトップと直接会談できるか否かは外交上の重要な問題であり、安倍首相がサウジ国王と直接会談できなかったことは、サウジアラビアが現在の日本をどのように評価しているかを示唆しているとも言えよう。

今回の両国訪問にケチをつける気は全くないが、締結された協定或いは防衛協議などはいずれも具体性に乏しく今後どの程度日本の国益に資するのか不明である。またサウジアラビアのトップ会談の相手が国王ではなくサルマン皇太子であった点にも若干の懸念を持っている。皇太子は同国No.2とは言え最近の

報道とその写真を見る限り明らかに精気を欠いている。筆者は彼がスルタン前々皇太子或いはナイフ前皇太子の二人の兄の相次ぐ死亡によりタナボタで皇太子になった、と書いたが(*)、その後の皇太子関連のニュースを読む度に彼の皇太子兼国防相としての実行力やカリスマ性は二人の兄の足もとにも及ばないとの感を否めないのである。せめて安倍首相または随行団の誰かが同国 No.3 のムクリン第二副首相或いは実業家のアルワリード王子にでも会うことができたなら今後の日サ関係にとって実のある訪問になったと考えるのである。

(*) ブログ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0232SaudiCrownPrinceSalman.pdf> 参照

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp